図書だより

〈第23号〉
平成２年10月25日
呉工業高等専門学校
図書委員会

木陰での読書もまた良し

目　　次

〔表　紙〕
〔巻頭文〕「図書館の発展のために」…… 図書館長　林　武美……2
〔随　想〕「二つの憶い出」…… 学校長　片島　三朗……3
〔読書感想文〕
文学
「阿Ｑ正伝」（魯迅）…… １Ｍ　武林　正昭……4
「宇宙の声」（星　新一）…… １Ｅ　新宅　武己……4
「十五少年漂流記」（Ｊ．ベルヌ）…… １Ｃ　南條　英夫……5
「きまぐれエトセトラ」（星　新一）…… １Ａ　土井　友恵……6
歴史
「事件・世相にみる昭和史」…… ２Ｃ　秋好　潤也……6
「邪馬台国が見える！吉野ケ里と卑弥呼の時代」…… ２Ｃ　新谷　直人……7
「ブッダ」…… ２Ａ　迫　真由美……8
「工匠たちの知恵と工夫」（西　和夫）…… ２Ａ　山野内孝宏……8
政経
「日米共存の条件」（竹村　健一）…… ３Ｍ　北橋　義樹……9
「ＥＣ統合」（三井銀行欧州本部）…… ３Ｍ　谷川　誠治……10
「円とドル」（朝日新聞経済部編）…… ３Ｅ　河合　崇……11
「テラスで読む日本の経営」
（日本経済新聞社編）…… ３Ｅ　吉丸　寿一……12
〔随想・読書雑感〕
「恋文」（連城　三紀彦）…… ５Ｃ　横田　仁明……13
推薦「九月の空」（高橋　三千綱）…… ５Ａ　横段　正俊……14
〔新任教官随想〕
第12回広島アジア大会に望む…… 一般科目教官　谷岡　憲三……15
図書館の効能…… 電気工学科教官　脇本　隆之……16
A　ski　runner …… 電気工学科教官　横瀬　義雄……17
〔私の推薦する本〕
続・読書雑感―「英語できます」（文芸春秋）、
「英語上達コース」（岩波書店）…… 一般科目教官　川尻　武信……18
「自然保護の法と戦略」（有斐閣）…… 土木工学科教官　藤原　章正……18
「南イタリアの集落　生き続ける石の住まい」
（学芸出版社）…… 建築学科教官　篠部　裕……19
〔新着図書30選〕……20
〔海外だより〕
イギリス生活を終えて…… 建築学科教官　正野崎昭二……24
〔お知らせ〕
平成元年度図書統計、時間外閲覧利用状況……26
〔編集後記〕…… 図書館長補　西谷　庸雄……26

巻頭文

図書館の発展のために

図書館長　林　武美

藤井前図書主任の後を継いだ昨年は、それまでの図書主任が他の教官・職員の協力を得て推進されてきた図書業務の電算化や夜間開館、電動集密書架を備えた書庫の増設等の仕事の締めくくりといったようなことを行ってきました。これらの課題は、少くとも昨年までは、まだ全国の高専図書館が実現しているとは言えない状況にあり、多くの高専で実現への努力が行われている様子でした。しかし、本校においては、これらが（まだ若干やることが残されているとは言え）一応実現し軌道にのった今、高専図書館としての次の段階での新たな発展（図書館自体の建物・予算・人員等の大規模な改善が一般的には当面まだ望めそうにないという状況を踏まえつつ可能な限りさまざまな努力を行って追求できるもの）を考えるべき時に至っていると言えましょう。

そして、その柱は、情報化社会に対応した発展（文献他の情報サービス、そのための他機関とのネットワーク化、ＡＶ機器等による視聴覚サービス、地域への開放サービス、複写サービス、等）を目ざすことではないかと思います。

他方、いわば図書館の原点とも言うべき、図書（本校にふさわしい専門図書を中心として更には一般教養図書を加えて）自体の画期的な充実（学校全体の予算が限られている以上、このような意図に対しては本校での図書館の役割・位置付けに対する教官の総意による合意が必要でしょう。）を目指すのも一つの方向でしょう。或は、閲覧室を特別居心地の良い（下手をすると特別眠り易いということにもなる）、多少豪華なものに変えるのも価値のある試みかも知れません。各れも、本来学校図書館は本と場所を提供して学生の勉学・教養のために役立つのが第一義的任務であるとするならば当然追求すべきことであるし、さらに将来の地域開放を目指すにも可能な限り充実させておきたいことです。

以上、図書館としての設備・機能の充実という、いわば図書館のハード面を主に触れましたが、ハードを充実させれば全てよしというものではなく、肝心の、〝学生にいかに図書館を上手に有効に利用させるか〟〝いかに学生を書物に近づけるか〟といったソフト面を考えることも図書館や図書委員会の大事な仕事です。これについては、現在行われている新入生オリエンテーション、図書だより・新着図書リストの発行、等の他にも、何かよい企画はないかを検討する努力が必要でしょう。そして、このソフト面については、いつも心せねばならないことは、惰性化・マンネリ化を防ぐようにいつも新鮮な試みを追求する気持をもたねばならないということだと思います。が、言うは易く、実際は他の種々の仕事の忙しさにかまけてついついいつものパターンで終ることが多くなりがちです。

このように、図書館として新たな発展を目ざすべきさまざまな抱負はありつつも、現在実際に何をやっているかと言われたら、視聴覚問題も運営委員会で一度心づもりの議論をしたきり、閲覧室の土足利用問題も（清掃や床のはり替え等色々問題があることもありますが）宿題のまま、といった状況で、このままでは今年は中だるみの年ではないかとおしかりを受けそうです。さし当って、図書館として出来る範囲ででもＡＶ機器の１～２台と若干のソフトを備えることから始めていきたいと思っています。これは図書委員会で承認され、これから具体化に入ります。以上とりとめもないことを書きましたが、図書館の発展のために、皆様の御叱咤をお願いします。

二つの憶い出

校長　片　島　三　朗

1　この本にゃあ嘘がかいたるで！

この３月のある日研究室の整理中、書棚から黄変したトレーシングペーパーに CHAPTER V MOLDING SAND…… とタイプと手描きで本を写したもの数10ページをとじたファイルが出てきた。

憶い出した！私がタイプしたこのプリントで輪読する当時の学生のK，Y，SやＩ君達の姿が浮んでくる。そう昭和30年頃。あの頃は、広島市内に外書を売る店はなく新刊案内も手に入らない。だから私達はアメリカＣＩＥ図書館（現全日空ホテル辺）や、宇品のＡＢＣＣ図書館へと自転車を走らせて技術書を漁ったものである。

その日はたまたまＣＩＥ図書館の理工系の書棚を見てゆくうちに THE METALLURGY OF STEEL CASTINGS; BRIGGS が目に当った。私は鋳型の本が欲しいのに鋳鋼の本では……と思いながら書架の前でパラパラ繰ったページに目は釘付けになってしまった。豊富な写真や図面とともに砂粒の成因からはじまって鋳型に起因する鋳造欠陥まで詳説されているではないか。このような一見専門書のありそうにない処にまでそれらを置いているアメリカの裕福さに目をむいたものであった。飛び立つ思いで手続きをすませ研究室へ帰り、コピー機も複写写真機もない環境とて、カーボンペーパを挟んでタイプをうち図面をかき、学生数だけ用意して週１回の輪読会に備えたものがでてきたのだ。

この本の裏表紙裏のポケットのカードには、三菱や日鋼の技術者の名前やハンコが並んでいる。一度返却してしまうと誰のところへ行くか判らないので、期限毎に自転車で通って確保に務めたものだった。

後日出版される日本の鋳造技術書に BRIGGS の本からの引用図を見るたびにあの頃のことを憶い出す。この本で一番記憶に残ることは、砂粒々形と鋳型の性質との関係が図とともに述べられ、丸い砂粒で造った鋳型は角型砂粒でのものに較べて高強度、低通気度であると述べてあることであった。これは私の知る限りでは今まで読んだすべての本と全く逆ではないか。当分の間研究仲間との論戦の的になっていた。しかし今では RRIGGS の説に異論を唱える者は１人も居ない。

2　１枚の図面がヒントに

昭和48年春からＶプロセスの研究に取りかかった。Ｖプロセスは昭和45年に日本で開発された造型法で、乾燥細粒けい砂を合成樹脂フイルムで覆い型内を減圧して造型し鋳込む方法である。最初はＶプロセス鋳物の被削性を調査したが、次の年からはフイルムの行方を追求した。合成樹脂フイルムは加熱されて何になるのか。どこへゆくのか。

当時一般にはフイルムは熱によってガス化し、鋳型内へ吸引されて入るが、まだ昇温していない型砂部で凝結して砂粒表面層を固めるために鋳物ができるとされ、この層をシェル層と称していた。しかし私たちの研究の結果、シェル層による砂粒の固定がＶプロセスの原理ではなく、この方法においては砂粒に鋳込み前はフイルムの存在により、溶湯が入ってフイルム消失後は溶湯／鋳型界面に吸気により発生した溶湯膜により、大気圧との差圧を保持して鋳物が出来ることを見出した。それ以来、フイルムを使用しない減圧造型法の模索が頭の中を占めてしまった。折も折、新着のA.F.S.TRANS．83（'75）の WITTMOSER 氏論文中の図に目が吸いつけられた。FLOAT MOLDING PROCESS と名付けられ、発泡ポリスチレン模型を流動状乾燥けい砂に埋め、下から吸気しつつ鋳込むという。これだ！発泡ポリスチレンはガスとなって逃げてしまう。鋳型砂は溶湯膜でしっかり固定されて、精度の高い鋳物が得られるはずである。この方法こそ溶湯膜理論の証明をしてくれるにちがいない。

即座に図面を引いて準備にとりかかり、旬日後に手

許にあったポリスチレンクッション材を模型としてシルミンを鋳込んだところ、模型表面がきれいに模写され、ところどころにあるベントプラグの痕跡まできれいに鋳出されているではないか。学生とともに喜んだのがつい先日のように思える。

これをきっかけとした一連の研究により台湾逢甲大学　楊助教授が工学博士の称号をもって帰国したのは今春であった。

読書感想文

文学

「阿Q正伝」

（魯迅）

1M　武林　正昭

この本を読みはじめてすぐにいままで読んできた本の出だしとちがうことが大変きにいった。いきなり筆者「魯迅」自身が、どのように阿Qの正伝を書こうかなやんでいるからです。それも一年も二年もです。それは、本文を読んでいって、それはあたりまえだと思います。自分のみのまわりにもこのような人は、とうていいないからです。人に殴られ、土塀にコツンコツンと頭をぶつけられると書いてありましたが、それでも、自分の精神的勝利法とかで、満足な気分にしてしまうからです。今どきそんなことをされても、自分の精神的勝利法とかで、どんなにいためつけられても、満足な気分になる人などは、まずいないと思います。もし、いるとしたら、とてつもない自信家か、かなりのかわり者だと思います。

じつをいうとほかにも阿Qのふしぎなところがあり大変興味が出た。まずはじめは、なんと姓名がはっきりしないことです。ふつう中国人は、姓と名と字があるが、阿Qは、姓があいまいだということです。筆者の魯迅じたいも、知らないのです。これは大変めずらしいと思います。こういうことは、中国の歴史の書物から見たら、かなり昔のこともしるされているのに。しかし、あとから趙ということがわかってきたので、さすがだと思いました。

第二に、阿Qの名を文字でどう書くかです。まず中国人が名に英語をいれるわけがありません。あて字ということは、バカでもすぐにわかると思います。筆者の魯迅もかなりなやんで、いろいろと推理して２つほどあげていました。阿桂と阿貴です。私自身どうしてそういうふうになるかは、あとの話で出てきてわかりましたが、中国とは、そのようなことから、人の名がわかりだすことが出来るのかと思うと、とてもふしぎでした。

第三に、阿Qの原籍がはっきりしないことです。浮浪者ではないのだから、「わからない」では歴史をゆがめてしまうと筆者も書いています。これは、阿Qが、どんな人か、なにかさそわれるような気がしました。どうしてこんなにわからない点が多いのだろう。これは、とても気がひかれました。

物語全体としては、最初と最後が、とても心にのこりました。まさか最後に阿Qが死刑になるとは思いませんでした。城内に入ったりして、いろんなことをやってきたあの阿Qが、趙家掠奪のつみで死刑になるなんて。みごとに阿Qがはめられたのがわかると、なんともいえない気持ちになりました。なぜこんななさけないことで阿Qが死なないといけないかと。魯迅も「中国の男はもともと大部分が聖賢になれる」と書いています。それも阿Qほどの人物をこのようなことで死なせたことが読んでいた人物もなんかなさけなかったです。

「宇宙の声」

（星　新一）

1E　新宅　武己

ぼくは、この星新一の書いた本がとても大好きです。なぜかというと、この人の書いた本はとてもたのしいし、夢があります。この本ではないのですが、「盗賊

会社」「きまぐれロボット」という本がとても好きです。

さて、この「宇宙の声」なんですが、主人公の３人と特殊能力ロボットが奇妙な〝電波幽霊〟の正体をつきとめるため、広い宇宙を旅するというものです。広い宇宙の中だから想像もできないような星があります。そんな星やでき事などを書いた本です。

だいたいのあらすじは、ミノルとハルコがベーター星の宇宙基地でオロ星人のデキの出した救助信号の電波を幽霊とまちがえて、その正体をさぐるため旅に出るというもので、キダとロボットのプーボをくわえていろいろな星を回っていきます。ものすごく攻撃的な鳥が支配しているキリラ星、そこで、オロ星人のデギと出会い幽霊の話も解決したけど今度はオロ星人が、植物をかけあわせているうちにとんでもない植物をつくってしまい、その植物のためにオロ星が滅亡しようとしているということを聞き、その手助けに行ったのですが、この植物はとても手強く、レーザー光線もきかず、高熱で焼いても、強い電波をあてても、ききめのある武器を作ってもすぐ抵抗力をつくり、きかなくなってしまうのです。そのうち種を飛ばしはじめ、だんだん宇宙にも出てきました。この種が宇宙に出てはたいへんと、考えたあげく前におりたテリラ星の鳥がかたい実を食べていたのを思い出しそれを連れてきて種を食べさせたけど、あまりききめがなくなってきた。そこへ、ほかの星へ助けをもとめに行っていたオロ星人が冷凍砲というものをもって帰ってきて、一時は成功したかに思えたけど、結局失敗に終った。しかたがないから、また、テリラ星へ鳥を連れに行く途中に砂の星を見つけ調べてみると、そこは昔とんでもない害虫があらわれ、すべてを食べつくしてしまったことがわかった。そこで、害虫をオロ星へ連れていき植物と戦せることを思いついた。それで害虫を大量にはこび植物と戦わせたが、だんだんおされてきた。それを見ていたミノルが、じっとしてはいられないと、光線銃をうったところ、植物と害虫の出したネバネバした液が大爆発して、オロ星はすくわれた、というあらすじです。

中でも、テリラ星で鳥におそわれないように夜行動していたらまいごになってもうすぐ夜があけそうになる場面が、スリルがあっておもしろかった。あとは、砂の星から害虫をはこぶ時、害虫が植物に勝っても、そのあと害虫を殺すことができないのでオロ星も砂の星になるという問題がでてきた時など、どうなるのだろうと考えてしまった。結局、雄だけをつれていけばふえないで、寿命がつきて死ぬという結論が出た。その時の気持がまたよかった。それと、害虫と植物を戦わせた時、どっちが勝つかわからなくてハラハラしたり、害虫が負けそうになった時など、オロ星がたすかるのかと思いおもしろかったです。

この本は、広い宇宙をテーマにいろんな想像をかきたててくれる、とてもおもしろい本でした。

「十五少年漂流記」

（Ｊ．ベルヌ原作）

１Ｃ　南條　英夫

僕は「十五少年漂流記」を読みました。この本は15人の少年が大あらしのために小さな島にふき流されたけど勇気をだして苦しさにもまけず、つらいこともがまんして一生懸命はたらき、いろいろと工夫してすみかをつくり食べ物を集め、フランスの子も、イギリスの子も、アメリカの子も黒人の子も、しっかり手をつなぎ、心をあわせ、助けあい、なぐさめあってがんばり、猛じゅうとも戦い、せめてきた悪いやつらもまかした、勇気があって、仲のよい15人の少年の話です。

僕がこの本を読んで一番初めに感じたことは、この15人はとても偉いということです。年上のものは年下のもののめんどうをよくみて、いろいろな規則をつくり勉強などを教えてやり、下級生は上級生の言うことをよく聞き、一生懸命はたらいたからです。とくに上級生のブリアンはすごいと思いました。ブリアンは年下のものをいたわるやさしさ、またジャガーなどの猛じゅうにむかっていく勇気などを持っているからです。そして僕が一番いやなやつだと思ったのはドノバンです。ドノバンは下級生からしたわれているブリアンや一番年上でいろいろ指示をだすゴードンをねたんだり、すぐ大将になりたがるからです。でも、ドノバンも最後にはみんなと協力してうまくやっていったのでよかったです。

話は変わるけど僕はこの本を読んでおどろいたことが一つあります。それはこの10才や11才の少年が鉄砲やナイフをうまく使いこなしていることです。これは

日本では考えられないことだと思いました。

また話は変わって、わるもの水夫８人の中のワルストンというやつは本当に悪いやつだと思いました。それはサンフランシスコの港から出たセバーン号という小さな汽船の船長を殺し、船をうばいとったからです。しかしこの水夫たちも最後には少年たちにみんなやっつけられたからよかったです。

僕はこの本を読んで少年たちの団結、協力、困苦に打ちかつ力、また、はじめ仲がわるかった少年たちが固く結ばれるようになったいきさつを通じて、国籍や皮膚の色がちがっても、たがいに親しみあい、助け合うことの大事さなどを知ることができました。

「きまぐれエトセトラ」

（星　新一）

１Ａ　土井　友恵

私は、この読書感想文を書くのに、色々な本を読みました。「名作」と言われている有名な本も読みましたが、あまり面白いとは思いませんでした。訳してあるからかもしれないけど、何か会話や表現方法が不自然なように感じられたからです。

それで、結局この本に決めました。この本は、日本にショート・ショート（短編小説）を定着させ現在ＳＦ界の第一人者である「星新一」という人の作品です。

この人の作品は中学の時の教科書にも出ていたと思います。確か「繁栄の花」とかいう題だったと思います。それは、相手の星との約束を守らなかった為に、自分の星が破滅へ導かれていく、といった内容です。これは、地球人の方のずるい所や、打算的な所が実は相手の星の人の計算通りだった、という何か皮肉めいた感じの事も書かれています。

この作品を読んで、この人の他の本も探しました。そしたら、自分の家の本棚に「星新一」という名前の本があったことに気がつきました。これが、「きまぐれエトセトラ」です。確か小学校か中学校の最初の頃に買ったと思いますが、その時は（何てつまらない本だろう）と思いました。この中一か中二の時もあまり面白いとは思いませんでした。しおりが５ページ目ではさんでありました。

夏休みに、久しぶりにこの本を見つけ、ひまつぶしにと、読んでみました。そうすると何年か前とは逆に面白い本だなあと思えました。

この本には、短編小説が何本も入っています。その内容は本当にその回ごとに様々な事が書いてあります。その中味は、日常になんとなく思いついた事や、日頃考えている事などが日記の様に書かれています。日記と違う所は、他人が読んでも面白い、という事ではないかと思います。

それには、誰もが少し（どうしてなのか）とか（面白い）とか、一瞬の間考えるような事を徹底的に調べたり、考えたりしているのです。その中には私も少し考えたりした事も載っていました。私の一瞬だけの感情みたいなものを、この人はこんな風に考え、文としてまとめられるのか、と感心しました。作品は２ページのものもあれば、40ページ以上あるものもあります。疑問の度合でページ数が違うみたいです。

中味は、何かを皮肉っているけど、悪口や嫌味とは違う、という物が多かったです。私は、これほど作者の人柄や考え方がわかる作品はないんじゃないかと思いました。この作者の真面目な所や、マイペースな所や、自分のことを決して謙遜しない所が、読んでいて楽しいです。他人の物の考え方も分かり、色々と面白いです。

これからも、この人の作品を読んでみようと思いました。

歴史

「事件・世相にみる昭和史」

２Ｃ　秋好　潤也

僕は昭和49年生まれで15年間しか昭和という時代を生きていません。しかし僕にとって今までで一番長く過ごした時代です。しかしこの昭和時代が激動の時代だと言われても見当もつきません。その激動の時代の始まりは不景気から始まったといいます。不景気というのは、地元の造船不況しか知らないので実感はつかめませんが、大学を卒業しても殆んどの人が就職できないというのはちょっとひどいなあと思う。僕が就職するときに、こんなことのないようにと思う。この頃

の事件は、説教強盗なんて言う冗談のような珍しい事件ばかりのようです。泥棒に説教されるほど屈辱を受けることは他にはないと思う。こんなおもしろいと言えば不謹慎だけど事件が起こっている頃日本は着実に戦争の道をたどっていたのです。僕はもちろん戦争を知らないし親も知りません。おじいさん、おばあさんになると知っていますが、それでもくわしくきいたことはありません。戦争が、今の日本を成り立たしたのは、この本にも書いてあるが事実だと思う。しかしその当時の人にしてみれば、たまったものではないと思う。戦争によって、たくさんの命が失われたことを忘れてはいけないと思う。そして戦争が終わり、日本に形だけでも平和が訪れます。その頃活躍したのが、古橋広之進だそうです。僕は泳ぐの遅いけど水泳部なので、少し興味があります。泳ぐことで人の心を明るくすることができるなんて素晴らしいと思います。

しかし、人々を活気づけたのは、もう一つ朝鮮戦争だったと言う。戦争は憎むべきものである。戦争によって失ったお金が戦争によって戻ってくるなんて皮肉なものです。それから日本が先進国の道を歩んでいくのですが途中全共闘があります。当時の大学生は大変だったと思います。運動をしている人は、それが正しいと信じて闘ったのであろうが、本当に勉強をやりたい人にはつらい時期だったと思う。昭和時代は激動の時代だというのが少しだけど分かった。不景気から戦争そして敗戦と進み、戦後は、朝鮮戦争から先進国へ今はアメリカと経済摩擦でアメリカより経済上は優位に立っています。しかし今の日本は昭和初期の戦争によるぎせい者の人達や、まわりの人々の苦労を忘れてはならないとこの本を読んで思いました。

「邪馬台国が見える！ 吉野ケ里と卑弥呼の時代」

（日本放送協会）

２Ｃ　新谷　直人

私は小学校６年生の時クラスで社会科の時間を何時間も使って邪馬台国を見つけよう！という課題のもとに作業をしたのを思い出しこの本を選びました。作業の結果は当然のことながら見つかりはしなかったけれど勉強になりました。

吉野ケ里の墓丘は南北に約40m、東西に約30mのもので大阪の仁徳陵古墳にくらべればかなり小さいが、これが造られたのが仁徳陵古墳が造られたのよりも、1500年も前だというのだから、それにしてはこの大きさにびっくりしました。これぐらいの大きさの墓なので、この本には「王」だったのではないかとかかれていたけど、私もそれぐらい有名というか権力を持った人だったのだろうと思いました。

吉野ケ里の甕棺墓地には、300体以上の人骨があってその中には、首が切られたためか頭蓋骨のないものや、12本の矢を打ちこまれたものがあり、これらは弥生時代が戦いの時代だったことを示しているそうで、私が想像していた、みんなが仲よく米をつくりはじめた弥生時代の思いとはちがっていたのでおどろかされました。そして、そのように考えてみると米を作りはじめたことにより、貧富の差がうまれ支配する人、される人ができ争いがはじまったのだと思いました。

吉野ケ里で発掘されたもののなかの、鏡とか剣とか玉とかは、後に「三種の神器」と呼ばれるものだそうです。

邪馬台国には九州説と畿内説とがあり、これまで九州では、大きな集落の遺跡は発見されていませんでした。そのことが、邪馬台国が畿内にあったとする説の大きな理由の一つでした。しかし、吉野ケ里遺跡が発掘されたことによって、邪馬台国が九州にあった可能性が強まりました。しかし、強まったといっても、これといった決め手もなく、むつかしい問題だと思いました。邪馬台国は卑弥呼のもとにより、とても生長してかなりの権力があったと私は聞いていて、その大きな権力を持った邪馬台国があった場所がわからないというのは、不思議なことであり、また、探すことは研究者や私達の夢だと思います。

この本には実在しない年号の鏡や、ふたりの卑弥呼など、とても興味ぶかく、おもしろい内容がいっぱいでした。

「ブ　ッ　ダ」

２Ａ　迫　真由美

この本を読んでびっくりしました。世の中には、こんなにすごい人がいたのかと。全部信じてよいのか疑問に思う程でした。

身分というものが人々を支配していたこの頃、大きく分けてこれは、四種に分けられ、いちばんいやしいスードラ（奴隷）、その上がバイシャその上にクシャトリヤ（武士）、そしてその上にバラモン。その二番目に高いクシャトリヤの王族のひとりとして生まれたシッダルタは、本当に感心するくらいな程やさしい子でした。

それにしても、驚きました。苦行とは、こんなに、ひどいものだったとは、知りもしませんでした。「からだをうんといためつけ苦しめる…たましいはそれだけ休まるんだ」こんな言葉がありました。実際このことは本当だったのでしょうか。苦行なんて苦しいばかりだが、その苦しさの中でこそ人間は偉大な真理を見つけだせる、その通りだと思いました。ブッダは苦行にはいるためウルヴェーラの苦行林へいきますが、ここは苦行のため何人もの人が死んだといわれているようなところでした。そこでブッダのした苦行〝断食〟はかなりひどいもので、よく、あそこまで、がまんできたなあと思う程でした。〝木になる〟とはどういうことなのでしょうか。２ケ月も何も口にしなかったなんて、信じられません。いばらの上にすわり…。この苦行を、ぶちこわしにしたのはスジャータという女の子でした。でもこの子が現われてなかったらそのままブッダは苦行を続けて、苦行林の人たちと同じように死んでいたと思います。スジャータの作った牛乳とごはんのスープを飲んで本当によかったなと思いました。

こうして苦行は、考えられない程ひどいところまですすみ、後に悟りをひらき、ブッダ〝目ざめた人〟と名のるようになるのですが、この悟りというのが、何とも偉大な発言ばかりなので、驚きました。死について、生について、身分について…。こんなにすごい人が今の世の中にいるとしたら、世界は変わっていると思います。

「工匠たちの知恵と工夫」

（西　和夫）

２Ａ　山野内　孝宏

登呂遺跡は弥生時代の住居址として学校の教科書にもよくでてくる有名な遺跡であるが、単に水田址や倉があるだけのものではなく、特に高床倉庫などの建物は現代人でも驚くような建築技術があることがわかった。昭和22年に登呂遺跡調査の時に１枚の板が出たという。最初はこの板が何かさっぱり分からなかったらしいが、あるときほかの遺跡からこれと同様なものでさらに棒がついていることから、今でも南方などで倉庫などに用いられるねずみ返しということが分かったらしい。今考えればただねずみを返してしまうだけのものかもしれないが、他の遺跡からもしこれと同様なものが発見されなかったら、この単なるねずみを返すだけの板を使った古代人の知恵を私達現代人は永久にそれが何だか知ることができなかったのではないかと思う。このように私達がちょっと思いつかないようなすばらしい知恵を持っているのだから古代人だからと言ってばかにはできないと思った。ねずみ返しだけではない、板壁の仕口などは現代でも受けつがれているようなすばらしいものであるらしい。この弥生時代から続き発展していった「手の技術」が最近プレファブやツーバイフォーとかの建物が増えてきてだんだん消えているのではないかと思う、なくさないように守り続けてほしいと感じた。

さっきプレファブがどうだかこうだとか書いたが、『方丈記』で有名な鴨長明の「方丈」すなわち十尺四方の家はすでに一種のプレファブ化された家ではないかと書いてあったのを見た時はおどろいた。『方丈記』からもこの「方丈」は簡単に牛車ではこばれたらしいという。また接合部には「掛金」があったらしく簡単に組立てることができたらしい。このようなことから鴨長明は、驚くほど建物に対して熱意を持っており、そしてすばらしい考えを持つ建築家ではなかったのかと思った。

このように昔の建物は当時生きた人々の知恵や工夫や技術、そして生活なのではないかと思いました。時代がどんどん新しくなっても建物の発展のために昔からの古い建物は残しておくべきだと思いました。

政経

「日米共存の条件」

（竹村　健一著）

3M　北橋　義樹

日本の経済力は大きく、世界に与える影響力は大きい。だから、できることなら日本と良好な関係を保っておきたいという国は多い。だが、ここまで日本が自国の強い影響力に対する義務や責任感を含めた「世界の中の日本」の立場を無視して愚行ばかりを続ければ堪忍袋の緒を切った国々が手を結んで日本を封じ込めようとしても何ら不思義ではない。その最先端に立っているのがアメリカである。だが、日本はそれに気がつかない。気がついているとすれば、よほど甘く見ているか、自信過剰になっているかである。そのいずれにしても、アメリカの怒りやイライラはいよいよ爆発寸前にあることは変りない。

日米構造協議がアメリカ側の提案で開始されたのは、1989年の９月のことだったが、ブッシュ政権は、それ以前、五月の段階で日本に対して実に心配りのきいた親切な警告を発していた。できることなら日米の関係を〝円満な夫婦〟として保ちたいとする大統領が、議会や国民の突きあげと、そういうことに鈍感な日本との間にはさまれ講じた苦肉の策であった。それはスーパー 301条によって日本を不公正貿易国と特定、人工衛星、木材、スーパーコンピュータをその指定品目としたことである。

スーパー 301条とは、ひと言で言えばアメリカを相手に不公正な貿易をする国に対してはそれ相応の報復措置をとる、という法則である。これが、アメリカの包括貿易法の切り札として法制化されたのは1988年の８月のことだった。その実体は増大していく一方の対日貿易赤字に業をにやした米議会が、日本を狙い撃ちにして定めたものなのだ。

アメリカがスーパー 301条の適用を決定する基準には、個別製品の障壁度や相手国との全体的な貿易関係のほかに議会や産業界の意見、そして世論の動向が重要な要素を占めているのである。幸い、1990年度のスーパー 301条特定国から日本は除外された。

そもそも日米摩擦がここまで緊迫、あるいは日本が世界から村八分にあいそうな状況に追い込まれてきてしまったのは、日本がいつまでたっても自分たちと同じ土俵の上でフェアな勝負をしようとしない、というアメリカをはじめとする国際社会の怒りが限界まできてしまったからである。

日米間には1950年代の後半から、繊維、鉄鋼、カラーテレビ、自動車、半導体、スーパーコンピュータと実に多くの経済摩擦問題が起こってきた。そのたびに日本は相手の要求に対して小出しに譲歩しながら、なんとかその場その場をしのぐというパターンを繰り返してきた。1985年までは個々の品目別に交渉していたが、それを分野別にまで広げたＭＯＳＳ（市場分野別）協議がこの年からはじまった。そして同年、いわゆる〝プラザ合意〟と呼ばれる先進国５ケ国の蔵相たちの話し合いで、為替相場をドル高からドル安に是正することを決めたのである。プラザ合意以降、それまでは１ドル＝ 240円ぐらいだったのが短期間で 120円台までになり、ドルの値打ちは半分となった。これにより欧州各国との間にあった赤字額は年々減少したが、対日貿易赤字は延々と続いている。その原因は日本国内のおよそ国際社会のルールを受け入れない排他的、閉鎖的な内部構造にあることがわかったのである。この４月に大蔵省が発表した1989年度の貿易統計によっても、対米黒字額は３年連続減少し、427億5,000万ドルだった。しかも、これまで輸出品目の代表格だった自動車やテレビ、ＶＴＲなどの海外現地生産が増え、その分だけ国内からの輸出が減ったことが輸出額を減少させた大きな要素となったという現実がある。こうした一連の流れの中で、スーパー 301条という奥の手を用意し、日米構造協議で脅しをかけてきているのである。

この本を読んで、日本はもう大国なのだからアメリカの理不尽な要求など聞かず「ＮＯ」と言えとよく言うが、それ以上に、今私たち日本人が考えなければいけないのは「ＹＥＳ」と言って、できるだけ相手に譲歩することだと思う。日米の関係がくずれてしまうと、日本はあっという間に破滅していくことになるのは明らかである。

日本は現在、自動車を年間 230万台を上限に輸出台数を抑えているが、輸入は２万台である。もし、アメリカ側が日本車を２万台しか買わないと言っても、そ

の言い分は筋が通っているので、他の自由主義諸国も非難することもないだろう。もしそうなれば、日本国内の全労働者の一割は自動車関連業界に従事しているので、たちまち大不況に襲われて、失業者が街にあふれるだろう。だから、日米共存こそが、日本が21世紀に向けて、国際的に確固たる地位を保ちながら繁栄する絶対条件であると思う。

「ＥＣ統合」

（三井銀行欧州本部著）

3M　谷川　誠治

ＥＣは、「共同市場を設立し、加盟各国の経済政策を徐々に接近させ共同体全体の経済活動を発展、拡大させ生活水準の速やかな向上や加盟国間の関係緊密化を促進すること」をめざしてきた。ＥＣ統合は、73年の拡大ＥＣ以降、極めてゆっくりしたものだったが、ＥＣ委員会ドロール委員長が1992年までに完成させるといったものである。

ＥＣ統合は市民労働者にとっても有益なものであり、その権利の拡大につながることを明確にさせようとしたものが、〝社会憲章〟である。社会憲章には、次のような項目がある。すべての市民に域内移動の自由を保障する。相応の賃金保障。生活労働条件の改善。社会保障を受けることができる権利。団体交渉権。職業訓練権。男女機会均等。労働者の経営上の情報入手、事前相談、参加の権利。健康上の保護、安全性の確保。児童・青少年の保護。老年・身体障害者の生活水準の確保。などがある。この社会憲章はドロール委員長が「この社会憲章の成立なくしてＥＣ統合はあり得ない」と言っているが、この社会憲章の採択にあたってイギリスは最後まで反対した。

域内市場統合の主要ポイントとして、物理的障壁の除去、技術的障壁の除去、税障壁の除去がある。

物理的障壁の除去として一つには、国境規制の廃止がある。ＥＣではこの項目については２段階で進めており、既に採択済みの「国境規制の簡素化」により「単一行政書類」による書類作りの合理化などが始まっている。次の段階では、共通法令を制定して域内国境におけるチェックを全廃することが進められている。他には、人の移動の自由化がある。ＥＣ加盟国の国民が国境で検査を受けるのは出入国管理と徴税のためだが、この分野での目標は当然のことながら、域内国境におけるあらゆる検問を廃止することである。検問の撤廃は、麻薬の不正取引、犯罪防止、非加盟国国籍者の共同体内通行、といった諸問題に対処する必要があり、また居住者や雇用との問題がある。

技術的障壁の除去としては、各種の技術的基準の標準化、安全性基準の統一がある。この他に、政府調達市場の開放、労働力移動の自由化、サービス市場の自由化、資本移動の自由化、産業協力の環境整備などがある。

税障壁の除去は、極めて困難な分野である。委員会の提案は１年以上も前に提出されているが、現在、ようやく理事会で検討が始まっている。

この他の問題として通貨の問題がある。欧州通貨同盟は数多くの統合項目の中でもその直接的に与える影響の大きさ、広さからもっとも注目を集めている項目のひとつである。第一段階として欧州通貨同盟へのＥＣ12ケ国が完全加盟し、既存の中央銀行総裁会議などの機能強化により、各国の通貨・経済政策の協調をはかる。第二段階として最終的な通貨・経済政策の権限は残しながらＥＣ閣僚理事会に各国の財政や金融政策に関する規制づくりの権限を与え、欧州中央銀行機構を設立し、各国の金融政策の調整・統合をはかる。第三段階として各国間の為替を固定し共通通貨の発行にもっていく。このような段階的実現へ向けての声明が発表された。この案はフランス、イタリア、スペインなどの弱い通貨をもつグループに強く支持されている。一方、西ドイツ、オランダ、デンマークなどは基本的に通貨同盟に賛同しながらも欧州中央銀行構想、財政権限の委譲といった点には慎重である。通貨統合に対してもっとも批判的なイギリスは、財政政策の統合、統一通貨・中央銀行構想には強く反対を示した。

ぼくとしては、このＥＣ統合はすばらしいことだと思う。しかし、ＥＣを統合することの問題点を改善することはかなり難しいことだと思う。特に、検問を撤廃することや、通貨の統合のことや、税の問題は、かなり難しいだろうと思う。検問を撤廃することによって、自由に人が移動できるようになると、麻薬の不正取引など、犯罪者までもが自由に移動するようになる。特にイギリスは、この問題が改正できないと言って強く反対している。この問題にどのように対処していく

かとてもみものだと思う。

ＥＣ統合に対してイギリスは全体的に反対しているが、ＥＣ12カ国が１つになるということはとてもいいことだ。今、イラクがクウェートに侵攻しているが、世界の国が１つになればこのようなこともないと思う。だからこのＥＣ統合は世界中にとてもいい影響を与えるんじゃあないかと思う。

「円　と　ド　ル」

（朝日新聞経済部編）

３Ｅ　河合　崇

1985年秋以来、円高の日々は始まり、現在に至っているわけである。いくつかの混乱を経て、1973年から主要国の通貨レートは、原則として市場での需給に応じて、自由に変動するフローティング（変動相場）制に変わった。それまで円のドルとの交換レートは、固定相場制の時代の１ドル＝ 360円から、短期間、 308円であった。つまり戦後から1971年までは、金と結びついた米国ドルが、帝王の座にあり、国際通貨基金（ＩＭＦ）がその下で、司令官役を務めてきたのである。ところが帝政は、いわば連邦制に変わった。フローティング制は、第１次、第２次石油ショックをはじめとする世界の政治・経済事件、それに各国、各ブロックの不均等な発展とにより、幾度となく動揺を繰り返す。しかし、基本的には、通貨レートが「世界株式市場」に上場している、各国の株価のようなものになった、と考えてよかろう。ただ問題は、通貨レートが、近代国家ならどこでも不可欠な、貿易のコストをいやおうなしに決定づける点にあった。1978年、日本円は、当時としては画期的な１ドル＝ 178円という高値を記録した。日本の産業界は輸出ができなくなる、と悲鳴をあげた。これは固定平価制度下の１ドル＝ 360円の倍にまで、円が高評価されたことを意味した。日本は「優良株」の最右翼と目されたのだ。しかし、フローティング制は、世界の均衡のとれた発展という見地からみると、万能薬とはいえなかった。対外収支、外貨準備、物価などといった、国の基本的な「経営実績」だけが、国の「株価」を決めるのではなく、金利水準の違い、景気の先行き、はては、いざというときのその国の軍事力までが、決定要因に加わり、基本はむしろ従属的なものとみなされた。倒錯が起こっても、市場はその流れに乗るだけで、基本への復帰を主導することはない。豊富な資金を抱えた資本市場は絶えず雪崩注意報下にあるといえる。国の「経営実績」の重要な項目である貿易すらも、企業の多国籍化によって、真の実力がつかみにくくなってきた。世界経済の野放図な成長が、国家の統治行為のひとつである通貨管理を大きく制約するに至っている。

1985年９月22日の、ニューヨーク・プラザホテルでの主要５カ国蔵相・中央銀行総裁会議（Ｇ５）、いわゆる「プラザ合意」までの間、米国政府には「ドル高こそ、米国の威信の象徴」という考え方が強かった。しかしドル高は、疑いもなく米国の輸出競争力を弱めた。輸入品に負けないものをつくる、という企業の意欲、設備、技術までも、傷めつけられたといえよう。ドル高の裏に、軍事費などによる財政赤字、それによる金利高、さらにそれと相伴ったインフレが存在した。貿易収支の逆調はひどくなり、対日を中心とする対外債務は、パクス・アメリカーナ（米国主導による世界平和）時代に蓄積した膨大な対外債権を一気に追い抜いた。

通貨の対外レートの高さが、国の威信そのものだ、という考え方は、ドゴール時代のフランス、ウィルソン労働党政権時代のイギリスにもみられたが、結果としては、はかない抵抗の域にとどまった。米国の場合は、それほどドグマティックにドル高に固執したとは思えない。むしろレーガン政権が、前政権に対抗してとった「経済への不介入」路線の、一つの結果であったのではなかろうか。プラザ合意で、 180度転換してドル安路線に走ったのも、米国一流のプラグマティズムから、見れるのではないだろうか、悪くいえば、場当たり的だったのだ。円が急騰したのもこれが基である。どこの国も自国通貨を切り下げることに抵抗がある。基軸通貨であるドルの方から見れば、安定した強さを保っていることが望ましいし、先にも述べた様に、レーガン米政権は高金利を背景にしたドルの高騰を「強い米国」の象徴として容認してきた。米国の経済実態からみても、本来もっと下がるべきドルを、無理を承知で高値に張りつかせていた面がそれである。だから、米国が「ドル高是正」に政策を転換したとたん、待ち構えていたようにドル急落に近い局面が生まれたわけである。

さて、私は、今回この様に円相場に関連する記事、連載をまとめたものを読んだわけである。普段の自分であれば、このような堅苦しい事には無関心であるが、これを機にと読んでみた。5年ほど前は、たしか1ドル＝ 220円ほどであったものが、関心を向けなかった間に、一気に 130円代に突入といった具合である。しかし、それ以前からの遠くて、デコボコの多い道のりの途中途中に、各国が集まっての国際会議や首脳会談、また日本単独あるいは協調しての金利下げや内需拡大策、企業の対応などがあり、これから先もまだ残っているということを一応理解することができたように思う。

「テラスで読む日本の経営」

（日本経済新聞社編）

３Ｅ　吉丸　寿一

日本的経営が「良い会社」の典型として世界に喧伝されて久しい。終身雇用、年功序列、企業内組合を3本柱とする戦後生まれの日本的経営は、昭和30～40年代の高度成長を支え、40年代末から50年代にかけての石油ショックを乗り越える原動力となった。今、世界一の債権国へと日本を押し上げたのは、日本的経営がうまく機能したおかげと言ってよい。

諸外国との貿易摩擦をさけながら、本物の国際企業に脱皮するという課題も背負わされた日本的経営の中身は、今大きく変わりつつある。〝新・日本的経営〟のキーワードは、「リストラクチャリング（事業再構築）」と「グローバル経営（地球経営）」。経営組織、労務管理、生産システム、すべてにわたるリストラクチャリングを経て、日本企業は、世界に通用する日本的経営を目指す。戦後の高度成長期までを日本的経営の第一段階とすれば、石油ショック以降の「減量経営」は第二段階、円高以降の「グローバル経営」は第三段階といえる。

日本的経営の特性を行動原理でみると、「集団主義」や「従業員尊重」があげられる。これらの行動原理は日本人の勤勉さ、忠誠心といった文化的土台が背景にあるため、そう簡単には変わらない。しかし、日本企業が得意としてきた経営戦略は少しずつ変化している。リストラクチャリングの重要なポイントはこの〝日本的な経営戦略〟にある。日本的な経営戦略は従来は、

①輸出至上主義

②シェア（市場占有率）重視

③量的拡大

の3つに代表された。しかし円高以降の経営リストラクチャリングで①輸出から海外現地生産へ②シェアから収益重視へ③量的拡大から高付加価値化へ、という新しい経営目標が打ち出されるようになった。

日本の外貨準備は1985年のＧ５（先進５カ国蔵相会議）以降も増え続け、今や世界一の債権大国である。財政赤字と貿易赤字が解決できないでいる米国とは対照的なので、安くて品質の良い商品を輸出して稼ぐという日本の得意ワザはもうこれ以上は使えない。自動車、電機、精密機械など輸出比率が50％を超す企業の多い業界は「海外生産へのシフト」を強め、採算の悪化を防ごうとしている。従来の海外生産は販売比率が十数％だが、海外シフトが急速に進むのは間違いない。「輸出立国ニッポン」の面影は薄れつつある。

日本の高度成長は日本企業の競争体質によるところが大きい。ライバル企業より値段や品質で一歩先んじることによってシェアを伸ばし、企業規模を拡大し、雇用を守る。「シェアの拡大によって生き残る」戦略だ。こうした成長パターンは需要が拡大を続け、輸出も制限されない時代には通用した。しかし、日本企業が国内の激しい競争意識を海外に持ち込んだため、貿易摩擦などを生む。最近、産業界では、目先のシェアにこだわるよりも中長期ビジョンの上に立った収益を重視する考え方が広がりつつある。今度は必要資金を市場調達する機会は確実に増える。米国のようにはならいまでも、株主の利益を確保するためにも収益重視型の経営にシフトしていくとみられる。

量的拡大は高度成長期の発想だ。量から質へ、その転換がうまくいかないと価値観が多様化し、国境が消えるかも知れない21世紀社会は乗り切れない。企業にとっては増収増益が理想の姿だが、売上高が増えなくても利益があがる体質に変える必要がある。そのためには、「高付加価値化」が武器になる。

以上、みてきたような激しい経営リストラクチャリングの中で、日本の経営者像も変わりつつある。これからの経営者は世の中の変化に対応できるバランス型の資質が求められるようになるだろう。グローバルな視点もこれからの企業トップには欠かせず、国際派は

急増しそうだ。

この本は、タイトル通り気楽に読め、また日本経済の歩みや現状、これからのゆくえがよくわかった。

日本的経営は、「三種の神器」ともいう終身雇用、年功序列、企業内組合をもとに高度成長をとげたが、その日本的経営もここ数年の急激な円高に大きく揺さぶられた。この円高が起こったとき、経営者や学者は「円高不況は全治10年」といったそうだ。しかし、そういった現象はおこらなかった。円高は長期的には良いことなのかもしれない。日本の企業は円高を機会にまた強くなったようだ。

ハイテク化で、日本の製品が外国にたくさん出まわり、日本たたきという結果を招いたが、外国は日本を封じこめるのではなく、日本の製品をまねるようにするべきだと思う。

随筆・読書雑感

読書感想

「恋　　文」（連城　三紀彦著）

5C　横田　仁明

もし、あなたの前に昔の恋人が現れて、そのひとが残り少ない生命だったら、どうしますか？

「恋文」は、将一の所に、10年前、恋人だった江津子が会いにきて、将一は江津子の看病の為に、ある日突然、家を出て行く所から始まります。そして、将一と妻の郷子、そして江津子の少し変わった関係が始まります。

将一という男は、馬鹿といわれても仕方無いと思います。昔の恋人が死ぬからといって、10年かけて築きあげた家庭も仕事も棄てるなんて事は、俺にはできません。俺だったら、勤め先の学校に江津子が来た時に〝なんで今さら、俺なんや〟と逆に今の生活を守ろうと、自分の事しか考えません。しかし、将一は尋ねて来た江津子に、「オレ、独身だから、死ぬまで世話してやるよ。」とウソをつきます。更に、妻の郷子に、江津子の友達になってほしいといい、江津子の前では、従姉という事にしていてくれといいます。郷子も〝馬鹿にしてる。〟と思いながらも、その頼みをきいたし、江津子とは本当に仲良くなります。実は、江津子は将一と郷子が夫婦だという事を最初から知っていました。将一に会うだけでいい、と思って会いに行った時に、「オレ、独身だから」というウソをきいてそのウソにだまされたフリをしようと思ったのです。

何故、将一はあの時、ウソをついたのか、が、今でもわかりません。ただ、将一のウソには、優しさが感じられると思います。将一は郷子が自分にほれていると知っていて、酷な頼みをいったり、急に家を出るなんて勝手な事をして、無責任な奴じゃないんかと思ったけど、実は違っていた。将一も覚悟して家を出ていた。そこで始めて、自分勝手で、無責任な男ではないんじゃないかと思いました。江津子との結婚式の時に郷子から離婚届をもらって、「俺、ラヴレター貰った。」と将一は言います。最初は「何言ようるんな？こいつ。」と思ったけど、読み終った後で、なんとなくその意味が伝わったと思います。あの離婚届が、郷子から将一へ宛てた最後のラヴレターで、郷子が将一に戻ってくるようにとの最後の手段だったんではないかと思います。

この物語の主人公は、多分、郷子さんだと思います。最初に、〝もし、あなたの前に……」と書いたけど、というよりは、むしろ、〝いきなり夫に家を出られて、あなただったら、どう思いますか？〟という感じだったと思います。印象に残っている所は、〝郷子が将一の馬鹿につきあい、つきあいきれずに悩んでいる自分の気持ちを打ち明けて、「それ、馬鹿なことじゃないわ。」、そう言ってくれる相手が一人でもいるとしたら、それは当の江津子だけなのかもしれないと思った〟という所です。

この小説を、珍しく授業をサボッた時に、たまたまひまじゃけえ、図書室に行って読んでいたら、思わず次の時間も、フケてしまった。この「恋文」は、短いものばかりで楽に読めたし、「あとがき」も良かったです。

推　薦

「九　月　の　空」

（高橋　三千綱著）

５Ａ　横段　正俊

私は、この夏１カ月間ほど北海道に滞在していた。滞在していたというのは、つまり旅行に出かけていたわけではなく働きに行っていたのである。

行先は、えりも岬から西に７キロメートルにある昆布漁農家で、いかにも「北の国から」という場所だった。ここの田舎の値は最上級である。価値あるものといえば、水と空気と静けさだけだ。テレビを見ることもなく、食物も質素の極みで、毎日毎日重労働の連続。そして得るものは疲労と忍耐という地獄の日々をすごしていたのである。

そんな毎日の中で読んだのが、この「九月の空」（高橋　三千綱）なのである。

「九月の空」は、昭和53年（1978）１月号の「文藝」に発表された作品である。丁度、彼が29歳のときだった。

半年後の７月、この作品が、第79回芥川賞を受賞して、ある意味で、「選ばれた作品」になってしまった。

前作の「五月の傾斜」は、「九月の空」に連続する為の第一章の役割を持つ作品と思われる。季節感が若者の行動と、心理を捉えて、強列な躍動感をただよわせている。そればかりか、「勇」という若者が眼を見開いたり、胸を突きだしたり、歩いている姿が、ほうふつと眼前に浮かぶのである。例えば、書き出しの一節を引用してみると、

「半年前、刃を振りかざして吹きつけてくる寒風に、首を縮めた。肩に力が入り、骨が軋む。たまらずに背中を丸めると、耳が持っていかれ、顔だけ上げると鼻が削がれた。入学したいと思っていた高校を下見に行く途中でぶつかった十二月の風を見て、勇は芯から凍った軀の中央に、一本、確かな自覚を備えた緊張感が張りつめるのを感じた。

更に引用すれば――「五月に入って、風は急に丸味を帯びてきた。一週間が過ぎた今では、夏の近づきを感じさせるほど暖い。（略）自分の姿がまるで、老後を春風に身をゆだねて楽しむ引退した小役人のように思えて、反吐が出る」

このように季節の風を、人間の心理面にたたきつけて、激写するように人間心理を描写している。描写がリズミカルに躍動している。躍動するリズム感の眼が若者たちのあの凄烈な剣道試合にひびき返っていた。また弾ね返って、思春期の若い男女の性の汗が、爽かな風の中ににじみ出ていた。からっとして、ユーモアが全体に漲っていることでもあり、これはアメリカ体験が、彼の文学風土の中に強い生の姿を植えつけている、と思ったのである。

それに「五月の傾斜」「九月の空」をしめくくる連作三作目の「二月の行方」は、基地のアメリカ兵相手のバーで、大人の猥雑な性の世界にかかわる若者同士のよどんだ暗い青春を素彫りし、凄烈な青春の孤独を描いている。

三作がそれぞれ、独自のテーマをかかげ脳裏に彩やかに焼き付くその描写は連作されることにより絶妙のつながりを持ち心に訴えかける。

この秋から冬にかけて読むには絶好の小説であることを保証できる作品である。

○「図書室では静粛に」

○「読んだ本はもとの位置へ」

○「貸出期間を守ろう」

○「図書室での飲食はやめよう」

○「脱いだスリッパはゲタ箱へ」

新任教官随想

第12回 広島アジア大会に望む

一般科目教官
谷岡　憲三

私は10年前、前任校で、九州のある高校の先生の学校視察を受けたことがあります。その時、学校訪問された先生が、広島県の高校のグランドの狭さに驚いて帰られたことを覚えています。その先生は、広島県内でも取り分け狭いグランドの学校を訪問されたわけではないのですが、その当時、その県では、すでに、大半の県立高校で、グランドも体育館も２つづつあるといわれ、広島県では考えられないほどの施設であることを聞かされました。まさにこの時、私は「スポーツ王国広島」が「過去の栄光」となって崩れた原因の一つにあげられるのではないかと思いました。第12回広島アジア大会は25競技が行われますが、これを機会に広島のスポーツ施設が充実するよう希望したいと思います。

経済大国日本、海外援助国日本と国際化が進み、世界の中の日本といわれていますが、われわれ国民にはその実感がわきません。しかし、今度の広島アジア大会は「広島の世界化」をテーマに首都以外の都市で初めて開かれるということで、いやがおうなしに、国際化の波が広島に入りこんでくると思います。

こんな中で、「平和都市広島」がスポーツの部門でも世界の仲間入りできるか、期待と不安がいりまじっていると思います。こうした国際的アジア大会を成功させるためには、競技役員による競技運営はもちろんのこと、競技者とそれを観戦し、応援をする者のマナーにあると思います。選手と応援者が一体となって競技が進められなければなりません。それには、応援者や観戦者が、競技やチームの選手をよく知り、関心を持っていないといけないと思います。25競技の中には、日本では馴みのない競技があったりして、ルールや技術のわからない人々が多いと思います。

よく地元の選手が活躍しないと大会が盛りあがらないといわれます。今、小、中、高校生の選手強化も進められているようですが、まだまだその成果が実っていないと思います。でもこれは、真の国際化スポーツではないと思います。どこの国、どの選手が勝とうと、その試合で、選手一人一人が自分の力をすべて出し尽くせればよいと思います。そのためには、観戦者が、選手を盛りあげるような雰囲気作りをしなければならないと思います。

広島東洋カープが初優勝をした時、広島県人すべてがカープファンで、野球をよく知らなかった人達も以前からのファンのように装い。又、近年のように、優勝から遠ざかると、ソッポを向いてしまうなど、強くて、勝たなければ応援しない。というように、勝敗にこだわり、地元意識の強い広島県人の気質では、はたして、アジア大会での国際的応援ができるでしょうか。

アジア大会は、「ヒロシマ」をアピールする絶好の機会だと思います。この大会が盛大に盛りあがるためには、早くから競技の普及や、向上も大切ですが、マスコミや、報道の力も重要だと思います。今年の第11回北京アジア大会の様子を広島県民に伝えることも必要だと思います。

このアジア大会が成功すれば、次はオリンピックをと、いう話もあるやに聞いています。ぜひ、それが実現できるよう期待しています。

図書館の効能

電気工学科教官
脇本　隆之

「俺ゃー私大しかいかんけーね！」

ある夏の夕方私は母親と喧嘩した。むし暑さと巨人戦に負けたカープのせいとで気分がむしゃくしゃしていたのもあって、この日は久々の大げんかとなった。当時私は、広島市内にある県内最大規模を誇る県立広島南高校(仮名)の２年生だった。どれくらいの規模を誇っているのかというと、たとえば生徒数にして、ざっと1500人以上いるくらいの規模なのである。ここで私は下から数えて50番目の位置を頂いていた。中学時代には見たことの無い、あまりにも珍しいこの席次は、私をあきらめと悔しさの世界へと誘い、自暴自棄へと陥れていたのであった。親ともよく衝突した。この日もバイトへ出かける私をたしなめようとした母と進学のことでつい口論となったのであった。とにかく、これだけ生徒数が多いと、勉強したって、遊んでいたって席次には変化が起こらないのである。もっともこれ以上下がりようがない所にいたという別の要因も加わっていたのではあるが。このことをいいことにして私は市民球場でコーラの売り子のバイトを始めた。カープフリークの私にとって、全試合バックネット裏で観戦できる醍醐味は堪えられないものがあった。だがシーズン中は月半分市民球場に拘束されてしまう。南校は一応進学校だったので私は進学希望にしていた。それゆえいささかの不安感が脳裏をよぎっていた。これでは私立も危ないぞと。

そこで無い知恵を一生懸命ひねって考え出したのが、ゲームの無い日の放課後には学校の図書館で(※)験勉しよう、ということであった。しかし遊び人を気取っていた私にとって、図書館についての情報は著しく無に近かった。唯一マンガから得た知識によると、図書館とは牛乳瓶の底みたいな眼鏡をかけた超ド級まじめ人間が分厚い本とくびっぴきになってせっせと何か書き物をしている所だった。私があんな所になじめるのだろうか。計画の遂行にはかなりの抵抗を感じた。だが、幸い私の友人には間違っても図書館なんぞに出現するような奴等はいなかったので、ばれる心配はなかった。おまけに図書館に行ってるということばの響きだけでなんかこう偉くなったような、背伸びしたような、いわゆる、おにいさんになったような気がして、首筋から背中にかけてがむずがゆくなったりもした。そこで一大決心をして図書館へと出かけたのである。まあ最初は単に気休めのつもりだったので、午後５時の閉館時間までだらだらと時間だけが過ぎていった。ただ黙々と図書館に居座ったのである。しかし抜かりはなかった。紀伊國屋に行って一番薄っぺらい英語と数学の問題集を探し出して来て、いかにも勉強しているように見せていたし、牛乳瓶の底とまではいかないまでも安いめがねを買ってきて、偉く見えるようにちゃんと偽装を施していたのであった。

そうしているうちにペナントレースは終わり、カープはいつものごとく優勝できず、当然私は暇になった。自然に毎日図書館に顔を出すようになった。すると驚くことに上から数えて50番の位置にまで成績が急浮上してしまっていたのである。こうなると根が単純な私の事である。図書館信仰が始まった。冷暖房完備で成績の保証もある。こんないい場所はほかには絶対見つかりっこないだろう。そう信じた。私の格好も以前と変わりなく、遊び人風を気取ったままだった。またいつの間にか眼鏡をはずしていることにも気づいた。マンガで得る知識には頼ってはならない事を一つ勉強したのであった。

冬は図書館が一年のうちで最もにぎやかになる季節である。私も３年生になり、２度目の冬を迎えた。この時期になると、勉強が手につかなくなってあせりが頂点に達してくる受験生が増加する。私の周囲にもどこからともなく図書館神話を聞き出してやってきた受験生が増えてきた。私はその中から友人を見つけ出すと、取っておいたストーブ横の特等席へと彼を招待し、くだらない話に花を咲かせたものだった。私はありとキリギリスの物語を思いだすと、自分をありにだぶらせて一人でほくそえんでいた。もう遅いのである。いま図書館さまにお願いに来たって、その効力が発揮される頃にはとっくに試験は終わってしまっているのだ。

図書館のおかげで無事進学を果たした私は、その後

も大学で幾度と無く図書館を利用した。あるときはレポートを片付けるために、そしてあるときにはクーラーのない下宿の代わりに昼寝をするためにである。肩肘張らず自分の好きなように。それが私の図書館とのつき合い方である。

※ 受験勉強のこと

A ski runner

電気工学科教官
横瀬　義雄

物心つく頃、私は父親に連れられスキー場に出かけていました。幼少の頃のアルバムを開くとそこには2本のスキー板に乗り、寒そうにしている私の写真があります。その頃から毎年冬になれば必ずスキー場に出かけています。また、今では冬だけではもの足りず夏でも人工芝のスキー場に行ったり、ボートで海に出かけるときは水上スキーの板を持って行き、冬山のスキーとは別のスキーも楽しんでいます。

さて、話を冬山のスキーに戻しますが、大学の頃私は体育会スキー部に所属して、体力作りをし大会に出場したりしていました。その頃までの私は〝上手なスキーのやり方〟を知らず、他人の滑る姿を見ながら自分のスキーの良いところ悪いところを判断し自己流のスキーを編み出していました。しかしどうしても克服できない部分が幾つかあり、解決できないままでしたが大学のスキー部に入ってやっとその残りの答を見つけることができました。その答は単に〝体力不足〟の一言でした。筋力が無ければ凹凸のある斜面を滑らかに滑りショックを吸収することはできず、持久力がなければ徐々にその吸収力が薄れバランスを崩すことになります。約50cmの凹凸では全て下半身のみで上半身のバランスを保ち、体が上下することなく常に一定方向を向いて滑らなければ滑らかにすることはできません。さらに1mを超える凹凸では全身でバランスを取らなければならない、ここでは頭を上下させないよう常に一定に保たなければならない、そして姿勢が伸び縮みしているので些細なきっかけで全体のバランスを崩し易いので常に斜面の状態を見極めていなければならない。スキーでは日常生活で使わない部分の筋肉を多く使います。シーズンオフの夏や秋でも陸上トレーニングを欠かさず続け万全なるコンディションでスキー場に出かけると、より優雅でより楽しく怪我や事故のないスキーを存分に楽しめることでしょう。

私がスキー部に入った理由はスキー自身を楽しむというよりスキーのスピードを楽しみたいからでした。スキーの競技にも幾つかの種類がありますが、私は小回転、大回転、滑降をやっていました。中でも最も好きな競技は滑降でした、2本の板を磨き上げ、スタートポイントで待っている時間、スタートサインがでた瞬間、滑るときには時には時速 100kmを越えることもあり、この緊張感はなんとも言い難いものがあります。滑降では約90km／h 前後で、通常のスキー板より堅い板が〝ワカメ〟の様に曲がりながらバタバタと足に振動が伝わってき、更に速くなると風を切る音で回りの音が聞こえなくなります。スキー競技は1～3分で終わりますがその短時間でどれだけの集中力を発揮できるかでほぼ勝負が決まってしまい、スピードが速いのでカーブやギャップで僅かに板が浮いたり板の前後左右に加える重量配分が適切でないとき順位は大きく下がります。そしてゴールして止まった瞬間の解放感と疲労感そして充実感の調和がなんともいえないものです。スキーに関わらず、また時間の長短に関わらず全ての力を出し尽くしたときのみ得られる快感ではないでしょうか。

大学を卒業して以来、競技スキーには全く参加していませんがスキー自身は続けていますしスピードを楽しむことも続けています。年々スキー場に訪れる人が増え日曜日などではリフトに乗るだけで30分ぐらい待たされる次第でありますが、急斜面や難斜面のリフトだけは少ない待ち時間で楽しくなるような斜面を味あうことができます。急斜面や難斜面の方が人の多い面で滑るより安全に楽しむことができ、またその様な斜面でのんびり滑るより速く滑る方がより安全に滑ることができます。何故ならゆっくり滑るということは常に自分の前後左右全ての状況を監視しながら滑らな

ければなりません。前だけ見ながらターンをしているとそこで後ろから来た人と接触する可能性があります。後ろから来た人が上手な人ならばその様なことはありませんが初心者ならば大事故になる可能性があります。ところが速いスピードで滑っているなら前の状況だけを監視しながら滑れば事故を自分自身で防ぐことができます。ただしそのゲレンデで自分が他の人より遥かに速く滑らないと意味がなく、スピードの出しすぎで自分のバランスを崩しては意味がありませんのでご注意を、またスキーでは通常ゲレンデの上から下へ一方向の移動しかないためスピードを出した方が安全という見方ができますが、一般社会では決してその様なことはないので誤解のないように。

最後に、一度もスキー経験のない方は是非一度挑戦してみて下さい。ただし病みつきになっても筆者は一切責任を負わないのでご了承下さい。

私の推薦する本

続・読書雑感

「英語できます」（松原　惇子著　文芸春秋）
「英語上達コース」（長谷川　潔著　岩波書店）

一般科目教官　川尻　武信

この原稿を書くにあたって、以前に原稿を依頼されたことを思い出した。昭和56年９月１日発行の図書だより４号で題名は、「読書雑感」であった。読み返してみると、自分がこんなことを書いていたのかと不思議な感じがした。同時に、ひと昔前の自分を垣間見ることができたような気がした。

今回は、原則論的な話はせずに英語に関係した本を２冊紹介する。ひとつは、松原惇子による『英語できます』である。英語ができるとは女性にとってどんな意味があるかを述べている。８章からなり、外資系企業に就職した女性、米国の有名大学をめざす女性、同時通訳をめざし通訳養成コースに通う女性、国際結婚した女性など様々な女性が登場している。

英語学習の上から興味深いところをいくつかあげると、通訳は翻訳家と同様にかなり高度な日本語の理解力と表現力が必要になること、プロの通訳者は必ずしも外国生活体験があるとは限らないこと、米国に長くいても必ずしも英語が上達しないことなどがある。さらに、日本が経済大国になったため、留学や国際結婚に対する考え方が変化していると述べている。男女共通の問題も多く含まれているので、男性諸君も是非一読することを勧める。

もう１冊は、長谷川潔による『英語上達コース』である。前書きにあるように、中学の教科書で習うような易しい英語の単語や文章を使って、日常会話の上達法、スピーチのまとめ方、手紙・日記の書き方を説明している。具体的にまたわかり易く書かれているから気楽に読める。ところで、著者によると、英米の子供がふれる英語の量は、週３時間の英語の授業の25倍とのこと。将来、いくら日本が国際化されても、この差を大巾に縮める授業数が学校で確保されることは難しい。ラジオやテレビを最大限に活用し、毎日少なくとも30分以上英語に親しむ習慣をつけることを勧めているが、この勧めの重要性も不変であろう。

山村　恒年著

「自然保護の法と戦略」（有斐閣）

土木工学科教官　藤原　章正

日本三景の一つ「安芸の宮島」。外国からのお客さんに日本の自然美を満喫してもらうには、広島では何と言っても宮島でしょう。島内には数々の名所がありますが、人気の的は、海にそびえるあの大鳥居のようです。しかし、何年くらい前からでしょうか。この素晴らしい風景に、大きな変化が起きてきました。鳥居の向こうに見える対岸（本土側）に、得体の知れないビルやホテルが建設され、海と山と鳥居の調和のとれた自然美に、邪魔ものが割り込んできてしまったのです。

宮島は、自然公園法などの法律によって、島内の開発行為が禁止され、自然環境が保護されています。し

かし、多くの観光客が目にするのは、島から見た鳥居と海とその向こうに見える対岸の風景です。宮島の美しさを保つためには、対岸の開発規制も含めた一体的な自然保護の対応が必要でした。一度破壊された自然は、2度と取り戻すことができません。

このような自然環境の破壊の例は、全国で数多くみられます。本書の中で筆者は、自然公園法を「美人優先型」、自然環境保全法を「血統重視型」という言葉で批評しています。つまりこれらの法律は、国立公園などの美しい区域や貴重な動植物が生息していて学術的に重要な地域に限って、自然を保護しようとしているに過ぎないというわけです。筆者はまた、自然環境は現世代のものだけでなく、将来の世代から信託されたものであるという「公共信託論」の考えを支持し、新たに「自然享有権」という考え方を打ち出しています。本書は、このようなユニークな表現を織り込みながら、わが国の国土開発と自然保護の法律の矛盾点についてわかりやすく解説したものです。

1987年のリゾート法制定に伴い、全国でリゾート地の開発が計画されています。広島県でも平成12年を目標に「瀬戸内中央リゾート構想」が提案され、既に基本構想は承認されました。自然保護が、今後ますます重要となってきます。土木工学科の学生の多くは、卒業後、このような法律のもとで実務に携わっていくことになります。公務員になる者、ディベロッパーになる者、それぞれ立場は異なっても、同じ公共事業に従事する者として、国土開発と自然保護について、今一度問題意識を高めてみましょう。卒業までに是非一読されることを進めます。

畑　亮夫 他著

「南イタリアの集落 生き続ける石の住まい」

（学芸出版社）

建築学科教官　**篠部　裕**

イタリアの風景を我々はイタリアを舞台とする映画によりかいま見る事ができる。「鉄道員」やひまわりり」といった戦後の代表的なイタリア映画は、イタリアの人々が貧しい中に懸命に豊かに生きる姿を写し出している。「鉄道員」の舞台となるローマの街の風景はゴミゴミとしており、そこで営まれる人々の生活の豊かさと余りにも対象的である。これに対して、農村の風景は、自然が豊かでとても美しい。映画「ひまわり」で見られるソビエト領の墓地の周囲に咲く美しいひまわりの群生は、イタリアにおいても見ることができる。バカンスで込み合う列車の窓からこのひまわりの群生を初めて見たときは、ただじっとこのひまわりに見入ってしまった。ひまわり畑の周囲には農夫がひまわりの種集めに働いており、これがあのイタリアの風景だと思った。

イタリアの国は大きく分けると、北部イタリアと南部イタリアに分けることができる。北部イタリアは近代工業と共に発展した地域で、経済も豊かで古くから多くの絵画や彫刻等の芸術が生まれたところでもある。ミラノ、ベニチア、フィレンッツェ等を思い浮かべればその様が容易に理解できる。これに対して南イタリアは農業を中心とするところで、北部イタリアのように豊かな経済による華やかさはない。ローマ・ナポリくらいの都市は容易に挙げられるがそれに続く都市はなかなか挙がらないものである。それほど、現代にあっては、北と南は大きく異なる様相をもっている。北に住むか、南に住むかは人々の経済的な豊かさを示すある種の指標ともなっている。

列車の窓より眺める南イタリアの風景は、素朴な農村風景が続く。土地は決して豊かでなく、荒涼とした丘が続いている。日本の様な豊かな緑をもつ農山村の風景はここにはない。きわめてドライな風景である。

樹木に恵まれない風土故、南イタリアの住居は全てが石により作られている。従って、その集合体でもある村や街も石で築かれていることとなる。そこには石の文化が存在する。そして、ドラスチックな変化を遂げた北イタリアとは異なり、古くからの文化が今も残り続け、石によって築かれた住まいによって、村や街が覆われている。本書は、カンパニモス（郷土愛）に受け継がれてきた南イタリアの素朴な石の住まいの風景を、我々に伝えてくれる一冊の写真集である。そこで、我々は一般的なイタリアの観光地に見られない、古くからのイタリアの新しい一面に出会えることとなる。

アルベロベロの家並み

新着図書30選

〈人文・社会〉

◆江戸雄介著

「日米構造協議の読み方」（日本実業出版社）

現在、アメリカは日本に対して、その経済力に見合う経済、貿易体制を要求して来ている。昨年から今年の6月末まで続けられた日米構造協議について、総論、各論を明快に説明している。現在の日米経済問題を知る上で格好の本であると言える。（寺本記）

◆泉　邦彦著

「恐るべきフロンガス汚染」（合同出版）

現在各所で使用されているフロンガスが、成層圏を汚染してオゾンを分解し、そのため地球に到達する紫外線が強化され、皮膚ガン等の健康障害が惹き起こされることが指摘されているが、本書はフロンガスの生産と使用、オゾン層破壊のメカニズム、核爆発との関係、人体への影響、その対策等を、わかりやすく説明している。（寺本記）

◆網野善彦、阿部謹也著

「対談　中世の再発見」（平凡社）

市と平和、裁判と賄賂、税ともてなしなど、中世における人と人の関係を手がかりに、真の「公」とは何かを追求する網野善彦と阿部謹也、二人の中世史の大家の対談。（宇根記）

◆国分康孝著

「リーダーシップの心理学」（講談社）

たとえば体育・文化の諸クラブ活動などで「どうもみんながうまく動いてくれない」といった悩みを持つ学生は少なくない。こんなとき、グループをいかに活性化して、いかに目標に向って結束するかについてなんらかの示唆になるのが本書である。グループの大切さ、将来の自分たちの心構えにも大いに参考になろう。題名は「～の心理学」といかめしいが、学問とはおよそかけ離れて、易しくわかりやすい文章で、だれでも気軽に素直にとけ込める本なので、是非とも本校の学生にすすめたい。（田辺記）

◆野池元基著

「サンゴの海に生きる」（農山漁村文化協会）

沖縄本島より、さらに南の石垣島において、海洋を埋め立てて新たに空港を建設しようという計画が持ち上がった。そこはアオサンゴが生息している海域で、サンゴ礁を生活の場としている島民のみならず、アオサンゴ礁の学術的価値を認めている人々を中心に、新空港建設反対の運動が起こり、沖縄県はあわてて計画地を変更するなど混乱し、しかも新たな計画も程度の差こそあれ、サンゴ礁を破壊する行為となることに変わりはないものであった。この件は今後、どう展開するものなのか判断はつかないが、離島という立地条件の中で開発か、自然保護かをめぐって島民が何を選択すべきか難しい問題ではある。（岡本記）

〈自　然〉

◆NHK取材班著

「銀河宇宙オデッセイ」（日本放送出版協会）

宇宙船〝ヘリオス〟に乗り、200億光年の宇宙を旅すという構成になっている。ヘリオス号は太陽系を横断し、銀河へ。超新星爆発のしくみや、新星誕生の場とみられる暗黒星雲の謎に挑む。又、銀河の中心にあるという、巨大ブラックホールの正体を探る。これらの事を写真を交えて説明してある。（小山記）

◆J. R. Mohrig〔ほか〕著　黒田玲子訳

「教養の化学―物質と人間社会―」（東京化学同人）

この本には原子の構造、周期表、酸、塩基、エントロピーといった基本的事項が、豊富な図表を使ってわかりやすく説明してある。又、基礎ばかりでなく、応用面にも力が入れてある。生活の化学といった身のまわりの事例を取上げ、新聞、テレビなどマスコミによく出る問題を、化学の基礎に根ざして説明してある。

（小山記）

◆方　励之・李淑嫺著

「方励之が語る宇宙のはじまり」（講談社）

最近はやりの宇宙論解説書の一つだが、著者が天安門事件で米大使館に避難した後に英国に亡命した中国の著名な反体制物理学者であることからして一層興味深い。数学は極力使わないとしながらも、適当に数式や数量的説明が与えられ、又、発見の歴史や中国文化を豊富にとり入れた特色ある本といえる。（林記）

◆フレッド・ピアス著

「地球は復讐する」（草思社）

長く環境問題を追ってきたイギリスの科学ジャーナリストによる地球温暖化と人類の未来を扱った本。地球温暖化の科学面についての幅の広い啓蒙的解説書である。環境破壊が進む現在に生きる私達の知るべきテーマであろう。（林記）

◆石川雄一郎 文・写真

「日本水遊記」（農山漁村文化協会）

日本のいろいろな町や村を訪ねて、水と人との様々な関わりかたを紹介する。河童の言伝えのある淵や、きれいな湧き水を利用した酒屋さんや豆腐屋さんの話、今でも道ばたの水路を洗濯や炊事に使っている町などそんな所があるのかと思わず行ってみたくなる本。

（西名記）

〈機　械〉

◆機械実験研究会編

「新編機械実験テキスト(1)(2)」（オーム社）

理科系の学問では、理論が偏重されて実際的な現場の知識、技術が軽視されるようなことのないように留意することが大切である。本書は、実験の基礎、参考知識などを解説し、学生が自主的に学習出来るように意図されており学生に一読を勧めたい。（大下記）

◆佐多敏之〔ほか〕著

「新しい工業材料」（森北出版）

技術の急速な進歩、いわゆる技術革新と、材料の革新とはまさに表裏の関係にあります。技術の革新は新しい材料を要求し、また新しい材料の出現によって新しい技術が生まれるのです。

本書は、材料を使用する立場を重く見て、第１編で全般的に共通した事項が取り上げられ、その後、３編にわたって、金属、セラミックス、高分子の各材料について各論的に概説してあります。

本書は、大学工学部あるいは工業短期大学、工業高等専門学校の学生を主な読者層と考えて執筆されています。（増本記）

◆田幸敏治、大井みさほ共著

「レーザー入門」（共立出版）

1960年、米国のメイマンによって最初のレーザーがルビーを使って発振して以来、これまでに数多くのレーザーが発見され、現在では、種々の計測や光通信、医療、金属やセラミックスの加工など、多方面の分野でレーザーは欠くことのできない存在になっています。本書はレーザーの発振原理から応用までを平易に解説したもので、「レーザーって聞いたことはあるがいったい何だろう」と思う人には打ってつけの１冊。

（赤尾記）

◆日本機械学会編

「先端複合材料」（技報堂出版）

先端複合材料とは、より高性能、より高機能を目指した複合材料のことであり、今や航空機、宇宙機器、自動車、船舶、スポーツ用具等の各分野において幅広く実用化されつつある新素材である。本書は、その実用化研究を詳述しており、先端複合材料の全体像を把握できる好書である。（岡部記）

〈電　気〉

◆和田龍児監修

「CIM/MAP 戦略 絵とき読本」（オーム社）

ＣＩＭ（コンピュータ統合生産システム）は現在の製造業が目指すべき最も強力な生産販売体制であると考えられているものである。時の流れは大量生産時代から顧客ニーズの多様化に即応できる多品種少量生産時代へと変ってきている。製造業における「情報システムの一本化」を狙ったＣＩＭの概念からシステム構築までを、図を多く用いて分り易く書いてあるので是非一度、見てほしいと思う。なお、ＭＡＰはＣＩＭのインフラとなる生産ネットワークのプロトコル（通信規約）のことである。（村上記）

◆原　潔著

「標準ＳＱＬプログラミング」（啓学出版）

ＳＱＬはJISにより1987年に公式に制定されたデータベース（ＤＢ）言語であるが、世界的にもＤＢ言語の標準として、将来にわたり広く利用されていくものである。ＳＱＬは、リレーショナルＤＢに対してＤＢ管理機能（ＤＢ定義、ＤＢ操作、トランザクション管理）を提供するものであり、ふつうはＣＯＢＯＬプログラムのなかで利用されることが多い。これからのＤＢシステムを理解し、使いこなすために読んでおく価値がある一冊として薦めたい。分り易い例題により理解を深め、練習問題によって応用力をつけることのできる好著である。（村上記）

◆白川　功〔ほか〕共著

「最新回路理論　基礎と演習」（日本理工出版会）

電気回路は電気工学科の学生にとっては、大変重要であり、内容をよく理解するために演習を重ねる必要がある。その点、本書は基礎を重視し、演習問題も豊富なため推薦した。（野村記）

◆白川　功、篠田庄司共著

「回路理論の基礎」（コロナ社）

回路設計と回路解析においては、回路方程式の導出とその解法を理解することが大切である。

本書は、回路理論で最も基本的な回路方程式の導出と解法に重点がおかれ、多くの例題と図を用いて、回路理論の基礎概念が容易に理解できるよう工夫されている。（奥本記）

◆金持　徹編

「真空技術ハンドブック」（日刊工業新聞社）

真空技術は材料・物性の実験的研究・開発に欠くことのできない技術である。真空状態を作る排気装置や真空度の計測装置は多種多様でその用途に合ったものを選択する時代になっている。その一助にこの本を。

（山崎記）

〈土　木〉

◆「測量叢書（全５巻）」

（日本測量協会）

ここ20年間、測量界は目覚ましい技術革新が進み、一方では公共事業の拡大にともなって測量事業が拡大し、そのニーズも高度化、多様化してきている。本叢書は、新時代にふさわしい内容をもつものである。

（阿部記）

◆岩の調査と試験編集委員会編

「岩の調査と試験」（土質工学会）

世界で最も複雑な地質構造をしている日本に、青函トンネル、本四連絡橋など世界的な土木構造物が完成したのは、岩盤に関する綿密な調査、試験が事前になされたためである。その経験がまとめられている。

（石井記）

◆河野伊一郎〔ほか〕共著

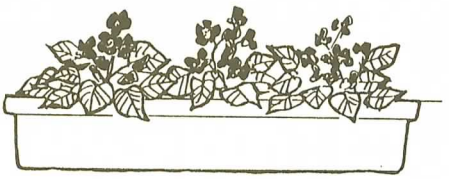
「土の力学」（技報堂出版）

この著書は土質力学を概説的であるが基本を丁寧にしかも理解しやすく書かれている。また、各章は今日の土質工学会の中心的メンバーである11名の教官が各専門分野の講義、現場の経験、研究の成果等を混えて述べている。特に土中水の浸透としての動き、連続体力学と土の応力及びひずみの関係、土の圧縮と圧密の相違、土のせん断における基本的考え方など土質力学を初めて学ぶ学生にも重要かつ有効な知識を与えてくれる。（小堀記）

◆道路研究会　企画・調査

「余暇時代の道路づくり」（トヨタ交通環境委員会）

本書は余暇にスポットをあて、人々の価値観や生き甲斐の変化を捉えながらも、短期的かつ長期的な展望のなかで余暇モビリティに答える道路のあるべき姿を示したもの。　（引用：都市計画No.164）（藤原記）



〈建　築〉

◆西山卯三著

「すまい考今学―現代日本住宅史」（彰国社）

あとがきに紹介されているように、この本は1984年1月から1989年5月までの5年間にわたって、雑誌『新住宅」に連載されたものを1冊の本にまとめたものです。内容的には彼の戦前、戦後を通じての住宅研究の集大成の一つだと考えられます。（岡本記）

◆プランニングOM編・著

「トイレは笑う」（TOTO出版）

トイレが笑うっていうのも何か不気味なタイトルだが、内容はトイレについての様々な雑学の集大成。トイレの起源から始まって、世界のトイレ、昔のトイレ、トイレで起こった怪事件やトイレの名称、トイレの落書きに至るまで、これでもかこれでもかとオンパレード。（西名記）

◆川口　衛〔ほか〕共著

「建築の絵本　建築構造のしくみ」（彰国社）

ハイテク時代と言われて久しい。豊かな空間を創造するためには豊かな空間を支える様々な構造の原理について理解する必要がある。本書は、「1．梁と柱」から「9．タワー」に至るまで、様々な構造の原理を多くのイラストを用いて分かりやすく解説してくれる。

（篠部記）

◆ヨーラン・シルツ著　田中雅美・田中智子共訳

「白い机―若い時」（鹿島出版会）

北欧を代表する建築家である「アルバ・アアルト」の若い時を、彼を取囲む家族や友人達を通してまとめた本である。建築家の幼い時や学生時代の興味あるエピソードを伝えてくれる。（篠部記）

〈共　通〉

◆向殿政男・武野　純共著

「PASCAL とプログラミング技法」（工学図書）

コンピュータで使われるプログラミング言語として、今後C言語が多用されると考えられているが、これを習得するには多少やっかいである。そのため、C言語への移行処置として Pascal をまず習得するのがよいと思われ、ここに紹介したものである。ただこの本は一例であり、数冊ほど購入しているので各自よいと思われる本を参照すると良い。（大橋記）

◆くろまめの枝豆会著

「カラーブックス　恋してパスタ」（保育社）

イタリアを旅行して食事において、避けて通れないものがこの「パスタ」である。その種類はトマトソースをベースにした典型的なイタリアン・パスタから、野菜や魚介類を取り入れたものまで多種多様である。本書は手軽に本物のパスタを楽しむ為の虎の巻である。

（篠部記）

海外だより

イギリス生活を終えて

建築学科教官　正野崎昭二

1．はじめに

平成元年2月から12月までの10ケ月間、文部省の在外研究員としてイギリスの University College of Swansea で研究の機会を得たので、大学での研究生活と同行した妻や中学生・小学生の娘達の生活を通して体験した事について書いてみたい。しかし、断っておくが、ここに書く事はイギリスの中でもウエールズに限定した事なので誤解なきよう御願いしたい。

2．学校制度について

ウエールズでは小学校と中学・高校をいっしょにした総合学校、各種専門学校、大学に分ける事ができる。日本の幼稚園、保育所といったものはなく小学校の中に含まれるので、3才児位から小学校と呼ばれる学校に通っている。総合学校は18才まで生徒が行く事ができるが、義務教育が16才までなのでほとんどの生徒は16才で修了し、就職するか各種専門学校へ行く。18才まで行く人は大学進学をめざすもので数%の生徒しかいない。大学はウエールズでは王立のウエールズ大学だけですが そのウエールズ大学はたくさんのCollegeで構成される。私の行った大学はウエールズ大学の中のCollege の1つです。

小学校では勉強に必要なものはすべて、教科書から鉛筆にいたるまで学校に用意されているので、思い思いのカバンの中身は午前と午後にある Break Time の時のおやつだけ。小学校の先生は、日本のように2学年位を持ち上がるという事はなく、3年生の担任に決ったらそのままずっと3年生の担任で、しかも教室も動かず、生徒の方が移動してくるといった仕組み。

総合学校の方は、教科書は各教科の教室に用意されていて、ノートは支給される。そのため、学校へはノートと筆記用具とおやつだけをもって行く。ノートは使いきってしまうと先生に見せて新しいノートをもらうといった制度になっている。教科書は学校に置いてあるので、小学校、中学校とも宿題は無し。また日本のように塾だとか、おけいこ事をする所もほとんどないので、学校から帰るとテレビを見たり友達と運動公園などで思い切り遊んでいる。日本の子供達と比較すると、何とのびのびしている事かと思う。

各種専門学校では非常に少なく、またコースも少ない。私の知った専門学校では、各種外国語コースと病院の訓練士になるコースだけだった。

大学は数も少なく、また、大学へ進学する人も日本に比べると非常に少ない。大学へはOレベル、Aレベルといわれる難しい試験に合格した人が、面接を受けるだけ位の試験で大学へ入学してくる。また、日本の大学にあるような教養課程というものがなくて、1年次よりいきなり専門科目へ入っていく。その為、私の通っていた大学は3年で卒業でき、早い人はその後の1年間で修士課程を卒業していく。各学年での試験では、試験問題を他の大学の先生が、履習した程度をみる問題にふさわしいかどうかをチェックするし、その試験の結果は掲示板に貼られて順位までも入れてある。そのため学生は良く勉強するし、理解できない事は研究室へ来て納得するまで質問したりしている。

3．ウエールズの人達

まずウエールズに到着して感じた事だが、非常に人なつこくて優しいし親切であった。家が決まるまで泊ったゲスト・ハウスのおばさんは、家を決めるためオーナーに逢いに行くと言うと車で送ってくれ、私達が

私達の住んでいた家

契約交渉する間待っていてくれゲスト・ハウスまでまた車でつれて帰ってくれた。引越しの時も荷物といっしょに送ってくれた。最初に接したウエールズの人にとても親切にして戴き幸先良いスタートをきる事ができた。小学校では校長はじめ担任の先生も英語の分らない娘達に早く慣れるようにと登校し始めて数日後に夕食に招待してくれたし、中学校ではクラスの人の何人からも家に招待され、娘も喜んで友達の家に行ってはイギリスの人がどのような家に住み、どのような物を食べているかを知り段々と慣れていく事ができた。私達もたくさんのイギリスの人に接する機会をもつべく努力して、たくさん友達、先生方を招待する事ができた。特に印象に残っているのは、娘達へ、逢う度にたくさんの先生方がHappyですか、Enjoyしていますかと声をかけて下さった事です。大学でも教授や秘書がいつも同じように声を掛けてくれて、英語力の乏しい私共を気遣ってくれ大変心強く感じたものです。例を挙げるときりがないし、どうしてこのように優しくできるのだろうかと不思議ですが、日本のように単一民族からなる国と違い、過去のたくさんの植民地支配の結果他国の人に対する思いやりが生まれて来たのかなあと思ったりもする。

4．ウエールズの人達の生活

ウエールズいやイギリスの代表的料理は何かと聞かれると困る。強いていえばローストビーフとフライドポテトぐらいかなと思う。イギリスを旅行する時に泊ったB＆Bという安宿では、朝食に、卵料理、ベーコン、ソーセージ、トマトなどが大きな皿に入ってでてくる。これがイギリスでは最も豪華な食事ではなかったかなあと思ってみたりもする。ウエールズでも同じだが、幸いスワォンジーに大きな市場があり、イカ、エビ、サバ、ひら目、サケ、タラなど豊富な魚や貝があったので肉料理ばかりに片寄らずに済んだ。肉は鶏肉、豚肉、牛肉、マトンと種類は豊富だが料理方法は簡単なものばかり。野菜料理も生のものかゆでるかのどちらかの方法が多い。食事の面では日本に比べて随分と質素だと思った。着る物ではポリエステル系が多い。紳士の国イギリスではさぞ着る物にはうるさいのではと思っていたが、自分さえ満足できれば他人がどう思おうと関係ないといった感じで、また他人の事には全然関心ないという感じの服装をしている人が多かったので安心した。家にはいつも注意を払っている。100年近く経過した家が多いが、日曜日などはペンキを塗ったりして常に手入れをする事に怠りない。また家の中にイギリス人は一番お金を掛けるのではないかと思うぐらいきれいに手入れされている。次に、自国では生産できないものについては非常に大切に使う。例えば、ティッシュペーパーがそれ。山は少しあるが木がはえていないので輸入する。そのためティッシュペーパーの値段は高い。日本なら鼻を1回かむとすぐポイと捨ててしまうが、イギリスの人はティッシュペーパーを使う時は角の方から使ってはポケットにしまいその次は中程というふうに少しずつ位置を変えて使っていくので1枚のティッシュペーパーが何回も使用できる。

私達の住んでいたスワォンジーの古い町並

4．おわりに

10ケ月という短い期間で見たイギリスのウエールズを正確に書き表わす事もできないし、また、間違った見方をしているかもしれないが、優しさ、価値観といった点では私共には見習うべきものがあったと思う。

お　知　ら　せ

平成元年度 図 書 統 計

1　利　用

(1)　貸出人員・冊数　　(　)内は前年度の合計を表す。
開館日数 287日

学年＼区分	人　員	冊　数
1　年	800 人	1,329 冊
2　年	576	914
3　年	1,069	1,861
4　年	1,069	1,775
5　年	1,016	1,823
学　生　計	(5,181) 4,530	(7,255) 7,702
教　職　員	(271) 290	(526) 569
合　計	(5,452) 4,820	(7,781) 8,271

(2)　入館者数　　42,568人（37,602人）

3　文献複写依頼

依頼先		件　数	枚　数
国立大学			
	電子式	139	1,066
	マイクロフイルム		
	コンテンツ	58	1,141
JICST		16	180
国立国会図書館			
	電子式	3	20
	マイクロフイルム		
その他			
合　計		(104) 216	(4,376) 2,407

2　蔵　書

区分＼分類		0 総記	1 哲学	2 歴史	3 社会科学	4 自然科学	5 工学	6 産業	7 芸術	8 語学	9 文学	合計
図書	和　書	4,874	2,409	5,173	5,212	8,682	20,641	467	2,224	2,650	5,793	58,125
	洋　書	455	466	129	217	1,115	2,846	5	41	1,328	1,291	7,893
	計	5,329	2,875	5,302	5,429	9,797	23,487	472	2,265	3,978	7,084	(64,289) 66,018
学術雑誌	和雑誌	149	8	13	55	44	263	3	22	16	10	583
	洋雑誌	11	8	1	1	23	130	3	2	38	4	221
	計	160	16	14	56	67	393	6	24	54	14	(792) 804

注　図書は冊数、学術雑誌は種類数

時間外閲覧（夜間開館）利用状況

（　）内は1日平均

	開館	利用者数	貸出冊数
2月	21日	1,157人（55.1）	330冊（15.7）
3月	7日	174人（24.9）	45冊（6.4）
4月	15日	418人（27.9）	164冊（10.9）
5月	22日	811人（36.9）	317冊（14.4）
6月	26日	1,477人（56.8）	379冊（14.6）
7月	14日	547人（39.1）	256冊（18.3）
9月	21日	1,156人（55.0）	212冊（10.1）

編集後記

ようやく第23号が刷り上がりました。これもいつもながら学生諸君や諸先生方のおかげと感謝しています。

ところで「図書室」が「図書館」へ、「図書主任」が「図書館長」へと改称されたのをご存じでしたか。図書館に関する諸規則も改廃されて整備されました。

「名称が変っただけで中味は以前と同じではないか」などと言わないで下さい。これから徐々に変って行きます。いや、変えて行かなければなりません。皆様方の今後一層のご協力をお願い致します。　（西谷記）